日本語教育学会東北支部集会
パネルディスカッション
日本語を母語としない子どもと親のための進路ガイダンス宮城１２年のあゆみ
― 子どもの可能性を後押しする“連帯”のかたち ―
報告書

日　　時　2020 年 12 月 12 日（土）13：45-15：15

方　　法　オンライン

参　加　者　50 名

パネリスト　李王寧、森野カロリナ、陳誠、大泉貴広、須藤伸子

進　　行　田所希衣子

運　　営　菊池哲佳、島崎薫

趣　　旨　外国から来た子どもと親は、言語や文化の違いから情報を得にくく、中学卒業後の進路を決めることが難しい実態があります。「日本語を母語としない子どもと親のための進路ガイダンス宮城」はそのような親子をサポートしようと、市民が中心となり、2009 年に始まりました。これまでの 12 年間、実行委員会では丁寧に話し合いを重ね、それぞれの立場をこえて、常により良いサポートのあり方を探ってきました。今回は、進路ガイダンス宮城のあゆみを参加者と振り返り、活動で大切にしてきたことや、これからの課題について考える機会としました。

「日本語を母語としない 子どもと親のための
進路ガイダンス 宮城」12年のあゆみ
ー 子どもの可能性を後押しする “連帯”のかたち ー

はじめに　　発足の経緯、ガイダンスのプログラム
　　開催した地区、「連帯」のかたち
進路ガイダンスの活動について　それぞれの立場から
　　実行委員会メンバー
話し合い、質問

田所: こんにちは。実行委員長の田所希衣子です。今日は宮城の進路ガイダンスの 12 年の歩みを振り返りたいと思います。この進路ガイダンスは 2009 年に始まりました。はじめにその経緯をお話しいたします。私が属している「外国人の子ども・サポートの会」が 2005 年に活動を始めて、最初の生徒が中国から来日した中学 2 年生でした。その生徒が受験するときに、どうやって受験したらいいのかいっしょに調べました。まず、生徒のお父さんと宮城県教育委員会に行き相談しました。公立高校の受験に配慮申請という特別措置があることを教えてもらい、それをお父さんが中学校の担任の先生に話しました。そのころは中学校の先生方も特別措置のしくみを知りませんでした。それから中学校の校長先生と高校の校長先生と教育委員会で相談を進め、その生徒は、受験科目を数学、英語、国語の代わりに作文と面接、試験時間の 10 分間延長という配慮を受けて受験し、合格しました。その後も何人かの生徒が同じように特別措置の配慮を受けて公立高校に入学しました。

そのときに感じていたのが、この特別措置を知らない生徒はどうしているのだろう。このような大切な情報をどうしたらほかの生徒たちも知ることができるのか。それで宮城県国際化協会の大泉さん、現在の仙台観光国際協会（旧仙台国際交流協会）の須藤さん、中国出身の李王寧さんに相談をしたら、すぐにこの進路ガイダンス実行委員会ができて、活動を始めることができました。

進路ガイダンスのプログラム	
	-必要な家族に多言語通訳がつく-
説明	高校（全日制・定時制・通信制、学科、授業料など）
	高校入試（入試制度、手続き、日程など）
先輩の体験談	
親の体験談	
質問の時間	-グループで話し合いの後、質問する-
相談	生徒同士の話し合い
	保護者の個人相談（教育委員会担当者、教師）
	保護者の情報交換（保護者のテーブル）

進路ガイダンス開催の前に、県の教育委員会が出している「宮城県公立高校ガイドブック」をもとに、進路ガイドブックを多言語で作成しました。８言語で作ってあります。それは全部、実行委員会の外国出身のメンバーが翻訳をし、当日は通訳を務めております。

今の進路ガイダンスのプログラムはこのようになっています。最初に高校の説明から入ります。以前はここを県の教育委員会が担当していましたけれども、教育委員会からこの説明にはもっと時間が必要なので、短時間で説明するには教育委員会ではなく実行委員会の方で説明した方が良いのではないかという意見があり、今は実行委員会のメンバーが説明をしています。その後、先輩、そして親が体験談を話していきます。それを聞いた後にグループに分かれて、どのようなことを疑問に思っているか、どんなことに困っているかを話し合い、グループごとに質問を出すというかたちになります。その後、相談の時間は三つに分かれます。子どもたちは生徒同士の話し合い、保護者は情報交換のテーブルに行きます。そして、教育委員会、中学校の先生、高校の先生が個人相談のコーナーを担当していて、保護者が相談をします。

ガイダンスを開催した地区

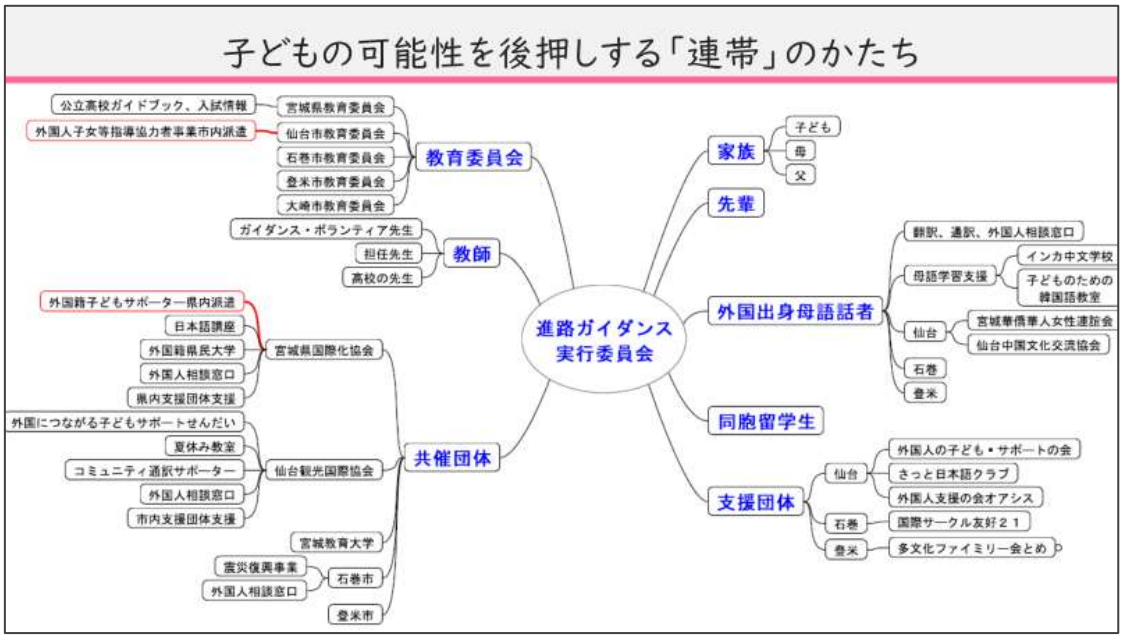
2009年 仙台市 第1回開催

2012年 石巻市 第1回開催

2013年 登米市 第1回開催

2017年 大崎市 第1回開催

最初は仙台市だけでやっておりました。その後、2011 年に東日本大震災が起き、混乱がいろいろありましたが、それぞれの団体が石巻や南三陸の方たちとさまざまな活動をしていくうちにつながりができて、2012 年に石巻で第 1 回の進路ガイダンスを開催しました。その後、登米、大崎と開催が続いていきました。実際にやってみて分かったことは、仙台市の場合は、日本生まれの子どもたちと、大きくなって来日した子どもたちがいます。石巻や登米や大崎の場合は、ほとんどが日本生まれの子どもたちで、外国人と括られるのはあまり喜んでいないようでした。でも、お母さんたちの中に日本語を読むことができない方が多く、学校からの受験の情報などを理解することが難しいそうです。それで、郡部での開催の場合は、保護者を対象として、わかりやすく正確な情報をお伝えするということも大きな役割になっています。



ここにあるのが、今日のテーマ、子どもの可能性を後押しする連帯のかたちですけれども、まず宮城の場合は、仙台市の教育委員会に学校にサポーターを派遣する登録制度があります。それからもう１つ、宮城県国際化協会には、宮城県全体の学校にサポーターを派遣する登録システムがあります。私達サポーターはそれらに登録をし、また自分の団体でも活動しているのですけれども、この大きな２つの学校への派遣システムがあることによって、自分の団体で活動するときには、学校外での活動だけを考えればいいわけです。

さて、進路ガイダンスを開催していくにあたって、いろいろなところでいろいろな方と会いました。この左側の部分ですね。教育委員会、それから特に宮城県国際化協会、仙台観光国際協会、そして大学。開催場所の市の担当者。その方たちがすでに外国の方たちとつながりを持ち、そのエンパワメントで大きな土台を作っていたことが、すごく私たちの力になりました。それを借りて、私たちは活動を広げていくことができました。この右側の方では、子どもたち、外国出身の母語話者の方たち、そしてそれを取り巻く支援団体。この支援団体の方たちは、石巻でも、登米でも、長い時間をかけて関係を作ってきました。そういう方たちの存在がとても大きかったです。

進路ガイダンスの活動について　それぞれの立場から	
大泉　貴広	MIA 宮城県国際化協会（共催）
須藤　伸子	SenTIA　仙台観光国際協会（共催）
陳　　誠	中国出身（中学卒後に来日・社会人2年生）
森野　カロリナ	アルゼンチン出身　外国人の子ども・サポートの会（保護者、通訳・翻訳）
李　　王寧	仙台中国文化交流協会（母語・学習支援）
田所　希衣子	外国人の子ども・サポートの会（日本語・学習支援）

これから、私達のメンバーがこの後、お話をしていきます。最初にMIA宮城県国際化協会の大泉さん、それからSenTIA仙台観光国際協会の須藤さん、それから、中国出身で、中学卒業後に来日して、社会人２年生で張り切っている陳誠くん、それからアルゼンチン出身の保護者であり、通訳翻訳のお仕事をしている森野さん、それから仙台中国文化交流協会に属していて、今いろいろな学校で母語・学習支援をしている王寧さん、そして私。順番に話をしていきたいと思います。それでは最初に大泉さん、お願いいたします。

進路ガイダンスとMIAの関わり①

◎MIAの子ども支援の事業について

・「外国籍の子どもサポーター」を小・中学校に派遣し、日本語学習・教科学習の支援、面談時の通訳支援等を行う。
・保護者、学校、教育委員会からの相談対応。
・教材等の貸出。
・日本語講座を主催しており、中学卒業後に来日した子どもたちの受け皿の一つに。

◎進路ガイダンスについて（MIAの考える進路ガイダンスの意義）

・実行委員会が定期的に開催されることにより、さまざまなセクター（市民団体、研究者、地域国際化協会）の人が集まって情報交換・意見交換が可能に。
→子どものことに関する課題の解決に連携して取り組めるように。
子どもたちのセーフティネットとも言える？

大泉：　皆さんこんにちは。宮城県国際化協会、MIA の大泉と申します。私達宮城県国際化協会は、地域国際化協会として県内の多文化共生推進のための様々な活動を行っている組織になります。子ども関係の支援もいくつか行っていまして、それについてまず簡単にお話をいたします。

まず外国籍の子どもサポーターという支援の人材を小中学校からの依頼に基づいて派遣をしまして、その現場で日本学習・教科学習のサポート、それから面接のときの通訳支援などを行っています。それから保護者、学校、教育委員会からのいろいろな子どもに関する相談にも対応しているほか、教材等も整備をして貸し出し等を行っています。それから最後は、これは特に子ども向けに行っている事業ではないのですけれども、日本語講座を主催しています。特に初級者向けには、週に 4 回と集中型の講座を行っていまして、中学校を卒業してから来日して、日本の中学校では受け入れてもらえないという子どもたちがしばらくそこで日本を学びつつ、高校受験に備える、そういった受け皿にもなっています。こういった取り組みをいくつか行っていましたので、田所さんから進路ガイダンスについてのお話をいただいたときも、我々が組織として関わるということはごく自然なことであったかなと振り返っています。

次に、進路ガイダンスについてですけれども、ここでは私達が考える進路ガイダンスの意義について簡単にお話をしたいと思っています。まず、実行委員

会が年度を通して定期的に開催されることによって、いろいろなセクターの人たち、例えば市民団体の人、研究者の方々、我々のような地域国際化協会職員の人たちが集まって情報交換・意見交換ができる、それはガイダンスのことに限らず、子どものこと全体についていろいろ話ができるようになっている点はとても大きいかなと思っています。そのことによって、進路のこと以外でも、子どものことに関する課題の解決に連携して取り組める、そういうネットワークが出来上がっているのかなと考えています。これはちょっと大げさな言い方になるかもしれないですけど、ある意味、進路ガイダンスで培われたネットワークが、この地域での子どもたちのセーフティネットにもなっているかなと考えています。具体的な例を１つお話しますと、最近もネパールの子が中学校を卒業して、宮城県に来たわけですけれども、日本の中学校で受け入れてもらえず、こちらの日本講座で日本語を勉強しながら、田所さんたちのグループで個別のサポートを受けているという子がいて、その子が最近、県教委主催の説明会に出席をする際に、SenTIA のコーディネートで、通訳者が配置されたということがありました。このように、進路ガイダンスに関わっているいろいろな人たちがある児童生徒の支援に携わっているという例があります。

進路ガイダンスとMIAの関わり②

・教育委員会との連携体制の構築。
・仙台市外の地域（石巻、登米、大崎）でも開催することで、その地域での子どもを巡る課題が可視化、意識化。
・子ども・大人を問わず、海外出身者の社会参画の機会（能力を発揮してもらう機会）に
→多文化共生の良い実践の場になっている。

続いて教育委員会との連携体制の構築と書きましたが、宮城県教委、仙台市教委、それから進路ガイダンスの開催地の教育委員会とは、この進路ガイダン

スを通してよりスムーズにやりとりができるようになったかなと考えています。率直に言うと、その年度とか地域によっていろいろ濃淡はあるんですが、このガイダンスをやることによって、少なくともそれ以前よりは教育委員会との情報交換がスムーズにできるようになったかなと振り返っています。

仙台市以外の地域で、先ほど田所さんからお話がありましたように、仙台市以外でも開催しておりますが、そういった地域では、率直にそれまであまり子どもの問題っていうのは意識されていなかったわけですけれども、この進路ガイダンスがきっかけとなって、子どもの問題、その保護者の問題というのはより意識化、見える化されたかなと考えています。

それから最後ですけれども、子ども・大人を問わず、海外出身者の社会参画の機会になっているということを書きましたが、今日も海外出身の方がいまから登壇してくださいますけれども、そういった人たちの関わりがすごく大きいかなと思っています。例えばそういった方々から、進路ガイダンスのミーティングの際に、当事者ならではの視点での課題ですね、私たちの中ではこういうことがいま問題になっているとか、子どものことに関してこういうことが課題になっているとか、日本の制度のこういうところが分かりにくいねっていうようなお話を提示していただいたりとか、それからもちろん資料の翻訳ですとか、当日の通訳という立場で関わっていただいたりということで、そういう人たちの関わりなしではこの進路ガイダンスは成り立たないかなと考えています。それから今日、この後お話いただく陳誠さんもその１人なのですけれども、かつては日本語を学ぶなどして支援される立場だった人たちが、大学生・社会人となって進路ガイダンスの実行委員会のメンバーになったり、当日の進行を務めたり、ということで支える側に回っているというような例もたくさんありまして、いろんな意味でその海外出身者の人たちに力を発揮してもらいつつ事業ができているということで、少し大げさな言い方にこれもなりますけれども、この進路ガイダンスの取り組みが、多文化共生の良い実践の機会になっているかなと考えています。

「外国籍の子どもサポーター」を対象とした研修会（MIA）

2011.3.11
講師:田所希衣子さん

写真をちょっとだけ持ってきたのですが、これは田所さんに講師になってもらって私達の子どもサポーターの研修を行っているところなのですけれど。ちょっと日付を見ていただきたいです。ちょうど震災の、あの地震の揺れがあったときですね。田所さんに講師を務めていただいていたという写真です。

日本語講座（MIA）

2011.12
閉講式でスピーチを
する陳誠さん

これは今日お話いただく陳誠さんが私たちの日本語教室で学んでいただいていたのですけれども、その閉講式のときにスピーチをしていただいている様子です。以上です。

進路ガイダンスとSenTIAの関わり

- SenTIAは外国人市民向けの支援事業や相談窓口を運営
- 若い家族が多く、出産や子育て、保育所などの相談が多かった
- 全国で緊急性、優先度が高い事業として、取り組みが始まっていた
- 教育は教育委員会が担当という認識→事業化できなかった
- 2009年、仙台市「多文化共生の推進に関する基礎調査」実施
  →概ね住みやすいが、「教育」と「就職」について満足度低い
- 2010年、「外国につながる子ども支援事業」を開始
  →支援者向け研修会や夏休み子ども教室を開催。
- 協会や教育委員会ではなく、多様な個人・団体による実行委員会
  →子どもと親の目線にたった内容と柔軟な運営を継続できた
- SenTIAでは、他の様々な支援や協働につなげることができている

須藤: 皆さんこんにちは。仙台観光国際協会の須藤といいます。よろしくお願いします。私達も MIA と同じように、仙台市の国際化協会として活動しています。私の方からは、進路ガイダンスが仙台で始まった頃の仙台市の状況と、私達 SenTIA の子ども支援事業の取り組みについてお話したいと思います。

SenTIA でも、外国人市民向けの支援事業や相談窓口を運営しています。仙台市の特徴として、在留資格でいうと留学生がとても多く、これは今でもそうなのですが、若い家族が多いという特徴があります。そのため相談窓口に出産や子育て、保育所などの相談が多く寄せられていました。その頃、やはり全国で外国ルーツの子どもたちの小学校入学や学校での支援について、いろいろと課題が出てきて、緊急性、優先度が高い事業として、外国につながる子どもの支援というものが始まっていました。しかし仙台市では、教育は教育委員会が担当するという認識がどうしてもありまして、私達国際化協会として事業を企画して予算を申請しても、事業化できないという時期が続きました。そんな中で 2009 年に仙台市が多文化共生の推進に関する基礎調査というものを実施しまし

た。これは1,500人の外国人住民の方にアンケートを送って、仙台市内での暮らしやすさをお聞きするものでしたが、その結果として、仙台市は、おおむね住みやすいけれども、子どもの教育と就職について満足度が低いという結果が出ました。最近でこそ日本語がそれほど話せなくても仕事を見つけられる、アルバイトとか非常勤の仕事は見つかりやすい状況になってきましたが、この当時は日本語ができても外国人だというだけで、なかなか仕事が見つからないような状況でした。その結果をもとに2010年、やっとSenTIAとして（当時はSIRAでしたが）、外国につながる子ども支援事業というものを始めることができました。その内容として、子どもたちを支援している方向けの研修会、夏休みに外国につながる子どもたちを対象に、日本語や教科を勉強する「夏休み子ども教室」というものを開催しました。進路ガイダンスの方にオブザーバーという形で参加はしていたのですが、次の2011年から正式に実行委員会にも入れていただいて、皆さんと一緒に活動するようになりました。

今振り返ってみると、進路ガイダンスの運営を国際化協会や教育委員会が主体となって行うのではなく、多様な個人や団体による実行委員会で行ってきたということがとても重要ではないかと思います。その結果、外国につながる子どもと親の目線に立った内容を常に心がけて、柔軟な運営を継続してこられたのではないかと思います。

小中学生のための夏休み教室（SenTIA）

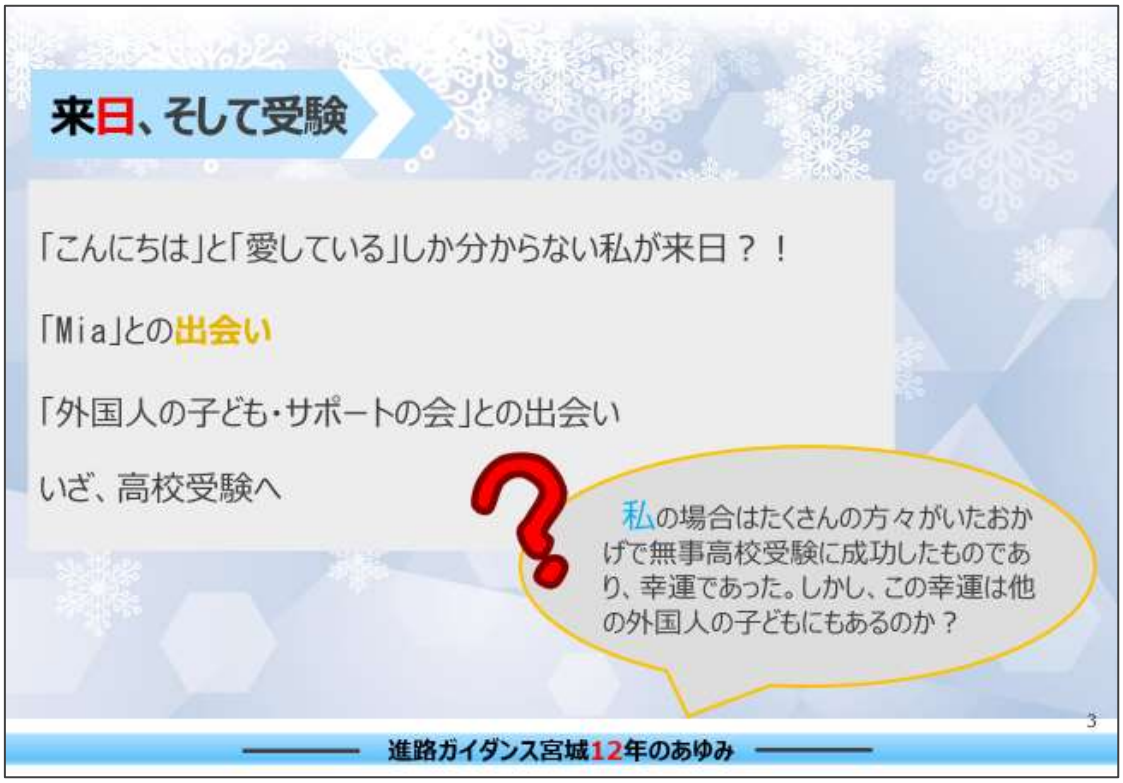
またSenTIAとしては、進路ガイダンスで出会った人々や機会を、他の様々な支援や協働につなげることができています。その例として写真を２枚用意しました。上の写真は「小中学生のための夏休み教室」です。田所さんにも当初からご協力をいただきました。進路ガイダンスにかつて参加した子どもたちに、先輩としていろいろ教えてもらったりしています。来年受験するからガイダンスに来るのではなくて、小さい頃から親御さんに情報提供をしたり、子どもたちにも先輩の姿を見てもらったりして、だんだんに備えていってもらうといいなと思います。

地球市民講座（SenTIA）

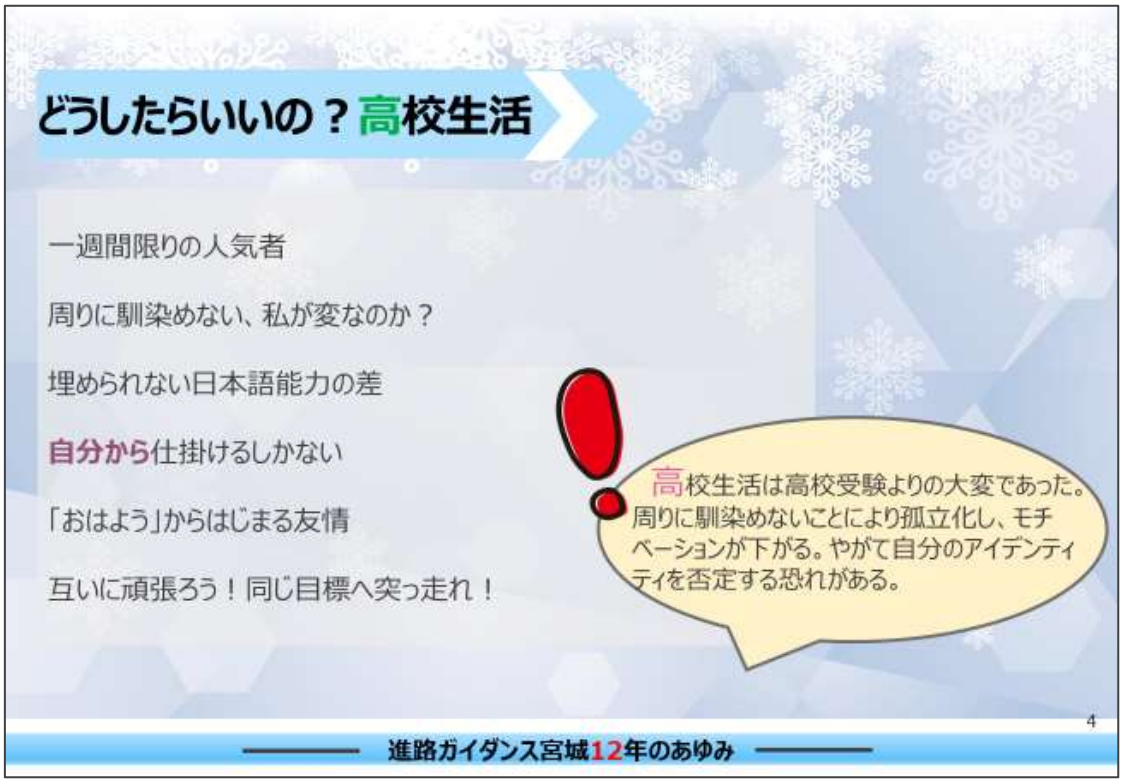
こちらは、地球的規模の課題について考える「地球市民講座」の写真です。田所さんと、進路ガイダンスに参加した若い学生さんお二人に登壇いただいて皆さんの経験をお話しいただきました。私からは以上です。

田所：それでは次に、中学を卒業して来日して、この進路ガイダンスを通って高校へ進んでいった陳誠くんお願いします。

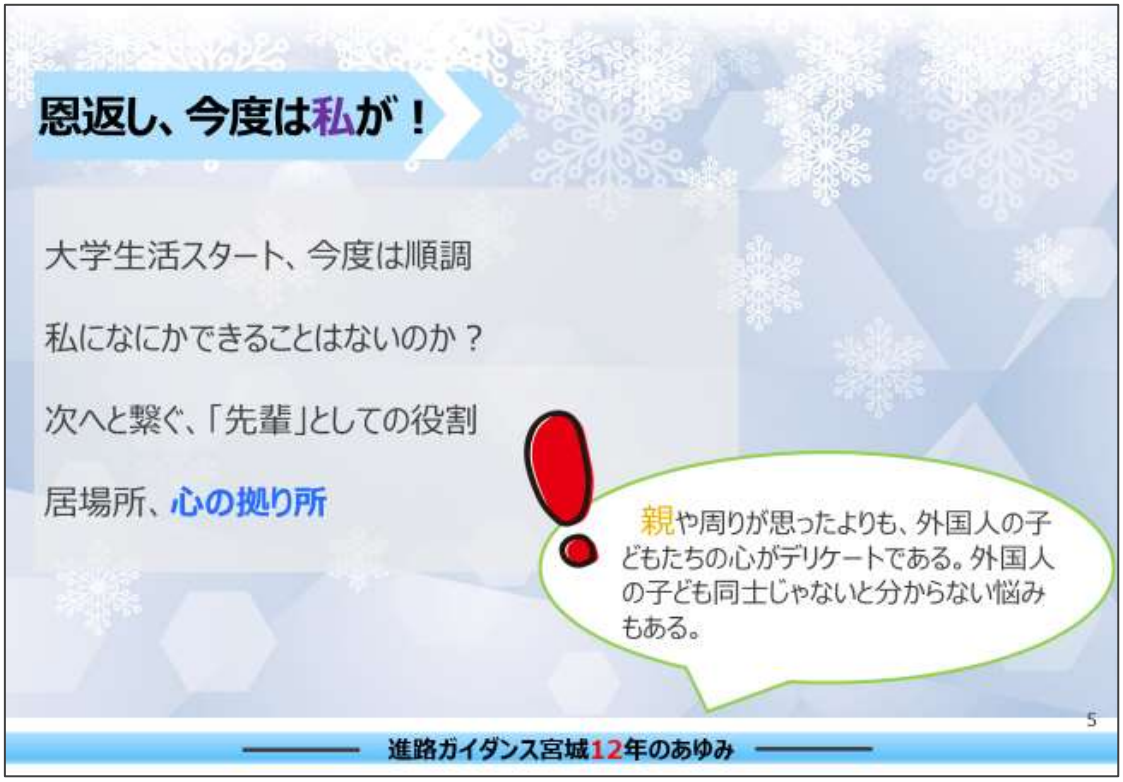
陳誠: はい、よろしくお願いします。はじめに、簡単な自己紹介をさせていただきたいと思います。陳誠と申します。出身は中国の上海市というところでして、年齢は、年が明けると 25 歳になります。決してもう若くはないということになります。来日は、いまは９年目に当たります。2011 年、ちょうど震災の年に来日しまして、いまは 2020 年ということで、ちょうど９年目ですね。職業は一般企業で正社員をしています。英語、料理が特技です。趣味はドライブ、野球はするのも見るのも好きですし、旅行も好きです。右側はちょっとした写真なのですけれども、あまり写真映りが良くないので、飛ばしたいと思います。本来の話に戻りますと、来日して 10 年目になります。当時はちょっとお家事情っていうか、不本意ではありましたが、来日することになりました。当時、日本語は「こんにちは」と「愛してる」しか分かりませんでした。そういう私が来日して、中学校を卒業して次に高校に行こうと受験を考えたものの、どうすればいいのか右も左も全くわからない状態でした。そこで出会えたのが MIA でした。



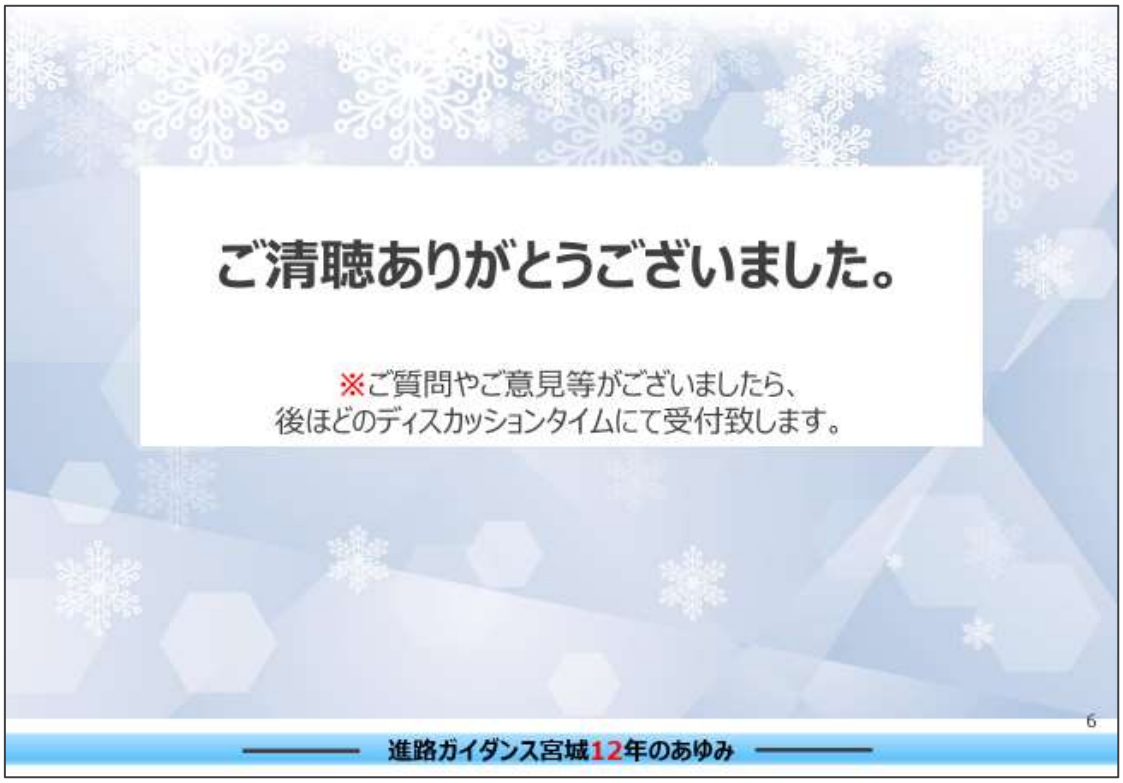
MIA では日本語講座があり、そこで基礎的な日本語を勉強したのですが、そこで言われたのが、もし受験するであれば「外国人の子ども・サポートの会」というのがありますよ、という話でした。MIA を通して外国人の子ども・サポートの会に出会いました。そこたくさんの方々、ボランティアの方々にいろいろ教えてくださり、いざ高校受験の結果、見事高校に入れました。ここで１つお伝えしたいのが、私の場合は本当にラッキーだったということです。たまたま MIA と外国人の子ども・サポートの会に出会ったのですけれども、その他の外国の子どもたちはどうなのだろうか、と思います。



高校に入って、いろいろ困ったことが出てきました。外国人だということで、物珍しさに１週間限りですが、人気者になったのです。しかし１週間後には、同じ黄色人種だし、大して自分たちと変わらないじゃないかということになりました。その落差は心的にはしんどかった覚えがあります。日本語ができないので、周りにもうまく馴染むことができずに、友達もできず、孤立化して、自分は変なのかなと思う時期もありました。そこで時間をかけて日本語の勉強をしても、やはり日本語能力の差があって、普通の日本人の友達を作るのは大変でした。そこで思ったのは、自分で仕掛けるしかないなということでした。積極的に自分から挨拶するというのはものすごく大事だと思い、朝に学校に行くと席にいる皆に「おはよう」と声をかけました。そこから徐々に友情が生まれてきました。最終的に高校３年間を終えて、大学受験のときにはもう皆と一緒に張り合うような仲になって、「お前には負けないよ」といった、関係作りにもできました。ここで私が思うのは、高校に入れたとはいえ、高校生活の方がもしかしたら受験よりも大変なんじゃないかなということです。孤立化することでモチベーション下がり、やがて自分のアイデンティティーやルーツを否定する恐れもあり得るということです。



その後大学に入り、今度は高校の３年間を経て順調なスタートを切って、私にしかできない、私にできることは何かなと思い、外国人の子ども・サポートの会でリーダーシップを取り、先輩としての役割を果たしていきたいと思いました。そういったボランティアの会は、我々のような外国人の子どもたちの心の拠り所であると私は思います。実は、外国人の子どもの心は結構デリケートなのです。外国人の子ども同士しかわからない悩みもあります。



ご清聴ありがとうございました。以上です。

田所: では、森野さん、お願いします。

森野: はい、こんにちは。実行委員の森野カロリナです。私の出身地は南米アルゼンチンなのですけれども、両親が日本人ですので、私は日系２世になります。日本に初めて来たのは 23 年前で、神奈川県に移ってきました。神奈川県でしばらく生活していたのですけれど、言葉が話せるというものの、読み書きができなくて、大変な思いをしたのですけれど、たくさん助けられました。神奈川県でも同じ外国人の保護者や家族の支援の活動に携わっていました。９年前、震災の後に主人の仕事の関係で宮城県に移ってきましたけれど、ここでも同じような活動をしたいなと思って、周りのいろんなところにあたってみました。その中で、宮城教育大学の市瀬先生と連絡が取れて、市瀬先生を通してこの実行委員会の皆さんに出会うことができました。東北は関東、東京と違ってスペイン語圏出身の方が少ないので、本当はスペイン語通訳ってあまり必要ないかなと思いました。にもかかわらず、私を通訳・翻訳と、それから外国人保護者の立場から、この実行委員会の仲間に入らせていただきました。年に１回開催される進路ガイダンスの中で、後半の時間で「保護者のテーブル」という時間があって、その保護者のテーブルを担当させていただいています。いったん休憩が入って、その休憩の後に参加者には大きく２つのグループに分かれてもらいます。大人のグループと、子どもたちのグループです。保護者のテーブルは、今写真をご覧いただいていますが、テーブルを集めて、そこにみなさんに入っていただきます。そのテーブルから今度は個別相談に移って、相談内容によって相談を受けてくれる先生たちや担当の方たちに振り分けられます。そこで自分の順番を待っている人たちもいれば、個別相談は必要ないという方たちは、この保護者のテーブルの中に残っていただいて、お茶とお菓子をいただきながら、団らんとした、とても楽しい時間になります。そこには時には先生方も入ってくださり、また相談が終わった保護者の方たちにも入ってもらいます。そこでは学校教育のことだけではなく、いろんな悩みやいろんな思いなど、たくさんの情報交換をします。毎回毎回、本当に楽しい時間になっています。同じ外国人同士という仲間意識が生まれ、本当に素敵な雰囲気が湧いてきます。

「保護者のテーブル」進路ガイダンス宮城2016年

最後にガイダンスで気づかされたことなのですけど、このガイダンスでいろんな形でサポートしてくれたり、お手伝いをしてくれたりする、たくさんの人がいたのですけれど、この方たちのほとんどは、何年か前には、私を含めてで、相談者として参加された方たちです。助けられた自分から、今度は誰かの助けになろうという気持ち、思いが、自然に湧いてきて、それを共有しながらこの活動に携わっていくという、それが自然なかたちで、連帯感が築き上げられてきたのではないかと私は今思っています。ありがとうございます。

田所: それでは、王寧さんお願いします。

王寧: 私は中国出身で 30 年前に来日しました。元留学生でした。今日は外国人児童の教育と進路ガイダンスとのつながりについてお話をしたいと思います。まずは翻訳通訳、または学校での学習支援、中文学校での母語学習の支援の立場からお話をさせていただきたいです。１つ目は、母語支援の大切さについて話をします。外国にゆかりをもつ子どもたちは、日本での生活、学校生活や学校での学習、また高校受験や大学受験などのために、日本語の習熟や日本語を勉強する重要性をみなさんが認識しています。ただ子どもの日本語の上達に伴って、あまり日本語が喋れない、日本語が十分ではない外国人の親は、私

のように途中で日本に来て、日本語が中途半端だと、子どもと交流するのが難しいため、子どもの教育について非常に不安がありました。私は日本の中学・高校・大学で勉強したことがないために教育制度などが全く分からず、不安や戸惑いがたくさんがありました。そういう問題があり、中国出身の華僑、日本人と国際結婚している人、またいわゆる残留孤児の人たち、中国に関心がある人たちの子どもたちが、親の母語としての中国語を保持できるように、また中国語を習得するために、2007 年に「インカ中文学校」という日曜中国学校を友人と一緒に立ち上げました。子どもたちはこの学校で勉強をして、母語が原動力となり、家庭内での親子の交流が増えました。それは、私たちの目に見えるぐらいの効果として表われました。もう 13 年になりますが、ずっと続いています。私は事情があって最近の２年間は活動を休んでおりますが、ここで母語・継承語教育における支援の大切さを、皆さんと共有しておきたいと思います。一方、その中文学校での学習は、学校の学習や進路についての母語での情報提供とか、また継承語教育の学び場としても重要な存在であることが分かりました。一方で、少子化や、新しい通信手段の進展に伴い、オンライン学習などいろいろな母語の習得方法が出ていて、中文学校のような形の学校を維持することが非常に難しくなっているという現状もあります。

次に、言葉の問題でいろいろな不安が持っている外国人の親、または外国人の子どもに寄り添うことが大切だということについて、少し話をしたいと思います。言葉の問題以上に、特に途中で連れて来られ、来日する子どもたちは不安を持っているので、それらの子どもたちに寄り添うことが非常に大切だと感じています。仙台市教育委員会では日本語指導ボランティアの制度があり、私は登録してもう 20 年近くやっておりますが、それが来日して間もない外国人の子どものために、日本語の指導、または日本語以外の教科の指導、さらに日本の教育事情、例えば学校のこと、ルールなどを教えて、子どもたちがいち早く日本の生活に馴染めるように頑張っています。ただ、仙台市教育委員会では一人の子どもには 20 回、多くて 30 回しか派遣がありませんので、その後に引き続きの支援が必要となります。ただ仙台には幸い、仙台観光国際協会、宮城県国際化協会、また田所さんのところの外国人の子ども・サポートの会のよう

な関連団体やボランティア団体など頼りになる存在があります。それらの団体の役割はとても重要だと思います。

みやぎ外国籍 県民大学（MIA）

例えば、宮城県国際化協会では、震災前に「外国籍県民大学」という事業があり、私はその一員として参加させていただきました。そこでたくさんの外国人が日本の文化、日本の法律などについて勉強できましたし、この事業が参加者同士の交流の場となりました。お互いに外国人同士で会う機会がない外国人たちは、生活面ですとか、子育ての経験などの悩みについて話し合うことができて、現在までも、県内のいろいろなところで生活をしている外国人たちが、この絆によってつながっています。私たち中国人にとっては、この県民大学がきっかけとなって、震災後に県民大学で勉強していた人たちが中心となって在日中国人のための初めてのコミュニティが成立しました。現在は「宮城華僑華人女性聯誼会」などいくつかの団体として、宮城県で活躍しています。これらは本当にMIAのおかげでできたことです。

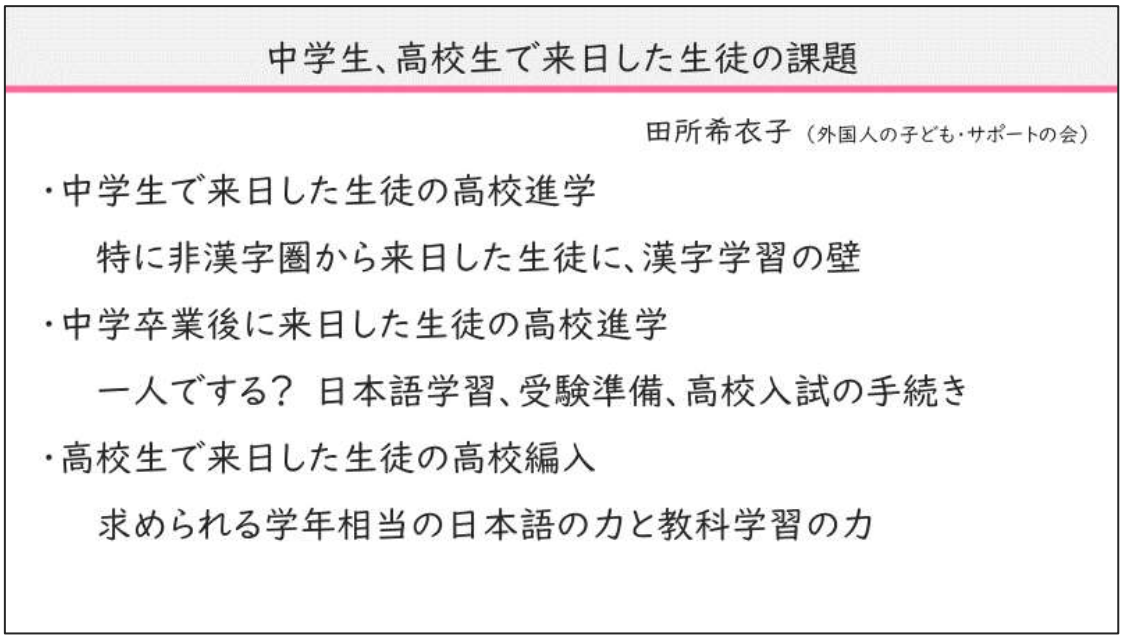
みやぎ外国籍 県民大学（MIA）

このような外国人のネットワークによって、進路ガイダンスも支えられています。なぜかというと、この外国人のネットワークを辿って、進路の情報などを届けることができました。また進路ガイダンスがあることを誰に伝える時に、このような組織がないと個人個人に届けるのは大変だったのですが、このようなネットワークがあることで情報を届けることが簡単にできるようになりました。

コミュニティ通訳サポーター育成講座（SenTIA）

また仙台観光国際協会では「コミュニティ通訳サポーター育成講座」があり、その講座を修了した人たちがコミュニティ通訳ボランティアに登録して、進路ガイダンスの広報や進路ガイダンスでの通訳の役割を果たしています。その通訳サポーターたちは、子どもと親、親と学校、また子どもと学校の間の架け橋として活躍しています。

進路ガイダンスのもう１つの大きな役割として、外国人としての私自身が感じているのは、外国人同士がつながることができたということです。外国人の親は、子どものいる小中学校では同国出身の方があまりいませんので、相談相手が少なく、子どものことを一人で悩むことが多いのですが、この進路ガイダンスがあるからこそ、お互いに知り合うことができて、進路ガイダンスをきっかけにチャットやLINEなどの別の通信手段を使って交流を深め、外国での生活を広め、安定させることができます。これは先程、誠君が言及してくれたとおりです。外国人として、SenTIAやMIA、外国人の子ども・サポート会のような外国人を支える活動をする関連団体や人々に感謝したいです。少し時間をオーバーしましたが、ここで終わります。



田所: みなさんのお話についで、私が最後になるのですが、私からは、ぜひこの場を借りて、中学生・高校生で来日した子どもたちの課題についてお話しし

たいと思います。まず、中学生で来日した子どもについてですが、言葉の問題だけではなく、出身国での学習内容や、それぞれの国での学習のスタイルの違いなどもあるのですけれども、とても大きな問題としては、短時間で日本語を習得しなければなりません。そういう大変なことを子どもたちはしなければならないわけです。特に漢字の学習は、日本の子どもたちが長い時間をかけて、繰り返し、繰り返し、生活の中で学んでくるものですけれども、外国から来た子どもたちはそれを短時間のうちに授業を理解する、教科書を読む、試験を受けるということにつなげていかなければなりません。そしてまた、先ほどお話した公立高校入試の特別措置ですけれども、宮城県では外国から来た生徒たちの滞日の期間は問わないとなっています。でも実際に子どもたちが受験をするときには、かなり日本語が上達しています。来日して４年ぐらいの生徒は、読み書きや教科学習の力がまだ十分でなくても話す日本語力があると、この子は配慮申請には当てはまらないのではないかという判断で、特別措置が受けられないことがあります。

それから、中学を卒業してきた子どもたちの大きな問題は、さっき誠くんも言いましたけれども、所属するところがないことです。義務教育の期間の中であれば、学校へ入り、先生、そして友だちに囲まれて毎日過ごしますが、卒業してきた子どもたちは、先生もいません。友だちもいません。ですから、日本語の勉強、それから受験の準備、そして高校の情報、入学の手続き、それを親と一緒に進めていくことになります。外国人の子ども・サポートの会では、中学を卒業してきた子どもたちには、チームを作って、毎日毎日勉強できるようにしていきます。でも、それができない、例えば、仙台以外のところに来た子どもたちは一体、本当にどうするのだろうか、私はここが一番心配なところです。

また、高校生で来日した生徒は、高校を辞めて来るのですけれども、来てから高校の編入を考えます。公立高校でも定期的に編入試験が行われていますから、それに通れば入ることができます。でも実際には、もうすでに２年生になっている学年に編入するためには、かなりの学力と、すぐに役に立つ日本語力が求められます。現在この高校編入、それから中学卒業後の子どもたちにとってはまず、もともと能力があるのに、その能力を生かすことができないという

問題があります。もう一つは、理科の勉強をしたいと思っている子どもたちにとって、化学や物理の用語の理解、それから文章を理解していく日本語力を短期間につけることはとても難しいです。特にこの理科系の勉強をしたいと思っている子どもたちには、道を拓くことがかなり難しくなっています。かつては国際結婚で伴われた子どもたちの来日が多かったのですけれども、現在、それからこれからは、仕事で来る家族といっしょに大きな子どもたちが増えると思われます。

ですからこの中等教育の、中学と高校の間にいる子どものことをぜひみなさんに考えていただきたいと思っております。

これで実行委員会の各メンバーからの進路ガイダンスにかける思いを話してもらいました。ここからはこのメンバーで話し合いを進めていきたいと思います。まず、李王寧さんが話していましたが、子どもたちの学習に寄り添っていく中で大きな問題だと思っているのが母語のことでした。母語の支援がとても大切ではないかということが話されました。それで最初に森野さんに、すでにお子さんは大きくなっていますが、ご自身の子育ての体験から、親として母語をどのように考えてきたか、話していただけますか。

森野: はい。ありがとうございます。私は日本に来て結婚して、すぐに２人の子どもが生まれました。子どもを何語で育てるかという大きな、大きなクエスチョンマークにぶつかって、さっき実行委員の皆さんの話の中でも出たんですけど、準備ができてなかったんですね。そういう課題にぶつかるということへの準備が。子どもが生まれて始めは、母語であるスペイン語で子守唄を歌ってあげたり、話をしてあげたり、スペイン語で育てていこうと思っていました。でも、１歳、１歳半のときに、１つの言葉、２つの言葉を子どもがつなげていくときに、スペイン語だけでは良くないなと直感的に思って、日本語も使わないといけないなと思いました。私は幸運だなあと思うのですけれども、日本語とスペイン語両方の言葉を使えるので、日本語とスペイン語で育てようとしました。いま言われるバイリンガル子育てです。ただ、長女が３歳になって、何て言えば良いのでしょう、ごもごもごも……と、本当に言葉にならない、何語なのかもわからない話し方をしたのですね。周りの子どもたちも、周りの大人

たちも、何を言っているのか聞き取れないと言われて。そこでまた悩みました。これはどうしたものかな、子どもに発達の障害があるのかなあと心配になりました。調べてみたりすると、そのバイリンガル教育の中の１つの、何と言うのでしょうか、すごく議論になっている点ですけれど、子どもは脳の発達、言葉の発達は、１つの言葉でまず先にして、３歳ぐらいまでの学習は、文法とかコミュニケーション能力は１つの言葉でできあがって、それから第２言語として２つ目の言葉が覚えられるという、そういう発達段階になっているということを読んで、１つの言葉を選ばなきゃいけないのだなと、また悩みました。スペイン語にしようか、日本語にしようかと悩みました。その悩みの中で気づかされたのは、１つの言葉か２つの言葉か、何語で育てるかと、何のために考えているのだろうって思わされて。やはり親子のコミュニケーションですね、それが一番私にとっては大事なのだなと思って。とにかく何語でやってもいいけど、子どもとこれからずっと親子としてコミュニケーションが取れる、コミュニケーションできるためには、そのためには、やっぱり子が育つこの日本の中では日本語でないといけないなと私は個人的に思って、それで私はスペイン語をとりあえずやめて、日本語で育てようと、そういう決断に至ったのです。子どもが大きくなって、もし親の言葉を第２言語として習いたいと思ったら、そのときにちゃんと第２言語として文法から、読み書きから、ちゃんと教えようと思って。そう思って日本語だけにしました。そしたら今、大人になった子どもたちは、娘たちは、他の家庭ではそれぞれ状況が違うと思いますけど、私達の場合には、お母さん、日本語を選んでくれてありがとうと言ってくれました。本当に子どもと一緒になってテレビを観ながら、本を読みながら、私は子どもと一緒に日本語を勉強しようと、そういう教育の仕方、教育方針は、ずっと続けてきまして。大きくなった娘たちは、今度はスペイン語を習いたいって言ってくれたので、スペイン語を読み書きから、アルファベットから教えています。そしたら不思議と、やはり２、３歳まで、育った環境にスペイン語があったので、それが残っているのですね、何か脳内の隅っこに。それで他の方たちとは、あまりスペイン語と接点がなかった学習者よりは、うちの子どもたちは学習能力というか、学習のスピードは速いなあと私は思っています。私の場

合はそういうふうに悩み悩み、悩んだ末に選んだ道というか、教育方針は良かったかなと今は思っています。ありがとうございます。

田所: 森野さん、ご経験をありがとうございます。多分、どこの家庭でもこのことは大きな問題だと思います。森野さんの場合、日本語が十分に理解でき、表現することができるので、子どもを日本語で育てるにも大きな力があるんだと思います。でも、お母さんがあまり日本語を十分に話すことができない場合、子どもがだんだん日本語だけになっていって、親と込み入った話ができなくなっていることがあちこちで起きているので、これから考えていかなければならないことだと思います。

次に誠君に聞いてみたいのですけれども、誠くんは大きくなってから来たので、母語をしっかり持ってここまできています。日本語と中国語、それに英語もできます。誠くんは、日本、それから、自分が育った中国、２つの国を見てきて、そこから体得したさまざまなことについて、後輩たちにメッセージとして何か伝えたいことはありますか。

陳誠: そうですね、まず母語というテーマですが、私の場合は 15 歳になるまでがずっと上海、中国で育てられまして、そこから日本ということだったので、日本に来るときまで中国語という母語が私の中にできていまして、そこから日本に来たということで、新たに第２言語を取り入れたということになりますね。来日したときの日本語は、先ほど申し上げたように「こんにちは」と「愛してる」ぐらいしかできなかった状態で、やはり当時はなるべく中国語を使いたがっていました。というのは、やはり自分の気持ちなど、感情表現するにあたって、言葉というとやはり母語である中国語が一番強かったんです。ただ、時間が経つとともに日本語能力がどんどん上がっていきました。上がっていくにつれて、日本の高校・大学では、特に高校のときですが、とにかく何もかも日本語で喋りましょうと私の中で決めたのです。もう夢まで日本語で見てしまおうぐらいのつもりでいたのです。果たしてそれが正解なのか間違いなのか分かりませんが、個人的には、言語学習の面では良かったのかもしれませんが、一方で、一時期は母語である中国語を喋るのがすごく恥ずかしいという

か、例えば親と外にいるときに、日本にいるのになぜ中国語で話しかけるの、というようにとても恥ずかしかったのです。いまはもうそのようには全く思っていませんし、日本語もできて、英語や中国もできるというのは今になって、むしろ私ならではというか、本当によかったと思っています。でも当時は、母親が一生懸命に中国語で話しをかけてくれたことが、母語喪失に至らない、大きな手がかりだったというか、大きな一歩だったと思います。それと、２つの国での体験ということについては、私は学生を経て社会人になったのですが、学校生活の過ごし方がやはり全然違うと思います。というのは、先程も少し話しましたが、日本の学校社会は、やっぱり出る杭は打つというか、自分と違うものとは一緒にいたくないという傾向があると思います。私の場合は特に、もう最初から違うぞという感じで、この人は特殊だと思われていたことがあったかなと思います。それは、なんでしょうね……嫌いというわけではないのです。話しかけづらいということなのです。日本語で話しかけていいのか、話かけたら何を喋ればいいのか、という。今になってその気持ちはすごくわかるのですけれども、やはり来日したばかりのときはその気持ちはなかなかわからないのです。なんで友達ができないのだろう、なんで誰も相手してくれないのだろう、というのが強かったです。ですので、後輩たち、これから私のように海外で育てられて来日する子どもにアドバイスするのであれば、悪意はないと思う、と教えたいですね。学校に入ってから、みんなが自分を嫌いだとか、いじめだというように、決めつけるのは良くないと思います。決めつける前に、まず自分は何がしたいのか、片言でもいいので、自分から積極的に発信することが大事です。また友達をつくるにあたって、友達というのはある程度、ギブアンドテイクがないとできないものです。要は、何をしてあげると、相手も何かをしてくれる。このことがずっと続くと、やっと友達になります。もちろん、大人のような金銭のやりとりとか、そういうことではなく、単純に朝に「おはよう」とか、そういった挨拶をしていくと、やがて相手からも言われるようになるということをぜひ伝えたいと思います。以上です。

田所:　ありがとうございます。私と違って誠くん、森野さん、王寧さんは、２つの国、３つの国を知っているので、それを比べることもできるし、いろいろな考え方、違う価値観を知っているわけですね。

それで、もう一度李王寧さんにお聞きします。実際に子どもたちと学校で勉強をしていて、特に母語のことが心配な子どもたちがいると思うのですけれども、王寧さんは、これからどういうふうにしていったらいいだろうと考えますか。

王寧: はい。先ほどの誠くんの話を聞いて、１つ思い出したことがあります。ちょっとずれているかもしれないですが。生まれ育った中国から途中で来日した子どもたちについて、先日に友人とランチをしたときの話です。２人の女の子が小学校５～６年生の頃に来日して、中国語を母語として中国で育てて、来日してから初めて日本語の勉強を始めました。誠君と同じく悩むことがありましたが、その後は自分たちの努力ですごく日本語が上達したのです。先ほどの誠君の日本語を聞いても、私とは比べて全然話にならないくらい自然で、東北地方のなまりも付いているような感じでしたね。母語を身に着けてから来日し、それから日本語を勉強した子どもたちの考え方として、誠君の話に共感しました。この２人の私の教え子ですが、今は大学を卒業して就職し、ちょうどたまたま私の別の友人と同じ就職先で、３人で一緒に働いているのですが、来日して 10 年以上となりますが、２人とも日本に対してなかなか馴染めずにいます。10 歳頃に来日して、今はもう 23、24 歳ぐらいなのですが、十数年間に経っても日本の生活に馴染めないということを、とても心配しています。先ほどの誠君の話を聞いて、さすが先輩だなあと思い、誠君の話を２人に伝えたいと思います。まず自分から発信し、自信をもって堂々と人と付き合うことが一番大事だと思いました。

私自身は２人の子どもがいるのですが、日本生まれ育ちで、母語は日本語ですが、親の母語は中国語ですので、私自身はできるだけ中国語を喋るようになってほしい、頑張って欲しいという熱意があり、そのことも１つ関係して十数年前に中文学校を立ち上げました。自分の子が私の母語を勉強して、私の国の文化を少しでも理解してほしいという考えです。また、よく言われるように、

日本人も外国人もみんな同じ地球村の住民だということを全ての市民に伝えたい、日本の方にも外国人が地域にいることを理解してもらいたい、そして協力し合ってよりよい地域づくりを行いたいという私の願いがありました。ちょっと話がずれているかもしれないですが、以上です。

田所: ありがとうございます。進路ガイダンスは子どもたちの進路のことを考えていくところなのですけれども、そこに集まったメンバーから出てくる話を集めていくと、ただ進学のことだけではなくて、その前の段階の、子どもを育てていく、そこの段階のことからすでに始まっているのだなということを痛感しています。例えば石巻、登米、大崎などに行きますと、日本で生まれた子どもたちがとても多いわけですね。そこでお母さんたちが一番気にしているのは、子どもをどうやって育てていったらいいのかということで、質問がたくさん出てきます。それで、今日はあまり時間がないのですけれども、宮城県国際化協会、仙台観光国際協会では、子どもたちに関するこれからの事業、親のエンパワメントも含めて、どのような事業計画があるのか、もしよろしければお話いただけますか。

大泉: 親、保護者のエンパワメントについて具体的な事業計画という投げかけについて、具体的に何かこういうことを考えていますとは残念ながら申し上げられないのですけども、田所さんのお話の中でありましたように、仙台市とそれ以外の地域での差というのは、やはり大きいと思います。仙台市内だと、田所さんたちのグループですとか、この進路ガイダンスの恒常的なネットワークなど、いろいろな支援の手立てがあるのですけれども、仙台市以外の地域だと、それこそ中学校卒業で来日したときの支援の仕組みづくりですごく苦労するのです。その地域で課題を理解してくれる市民団体や行政の人たちがいないと、仙台市内で構築できているようなネットワークがなかなか作りづらいので、そこは何か考えていかないといけないと思っています。もう一つ課題になっているのが、イスラム圏出身の世帯が増えてきていて、そうした世帯の子どもたちが学校に通うケースが増えています。県北のある市の小学校では、１つの小学校に７人のイスラム圏の子どもたちが学んでいる実態があります。学校

内でイスラムの文化についてはなかなか理解が進んでおらず、いろいろ苦労なさっているという事例もあり、次年度はイスラム圏の子どもたちのサポートについて考えていこうというところです。

須藤: 日本語教育の面で、市内の日本語教室に通えないとか、日本語を教えてくれる人を見つけられないという人に、どのように日本語学習の機会を持ってもらうかということに取り組もうと思っています。今日ご参加の方の中にも何人かご協力いただいている方がいらっしゃいますが、文化庁の事業に申請して今年度から日本語教育の体制整備をしています。その中で、先ほどの田所さんのお話にもありましたが、これからは働くために日本に来る家族というのが増えていくことが予想されますが、来日してまず日本語学習という機会は多分ないだろうと思われます。来日してすぐに仕事を始めてしまうので、両親ともに働いて、子どもは学校に行くという状況が考えられます。そのため、昼間の日本語教室以外の、オンラインだったり、夜だったり、いろいろな手段で日本語を勉強できる場をつくれないかと思っているところです。もう１つは、日本人側や行政が用意する学習の場ではなく、外国人の皆さん自身がどういうことを勉強したいかを考えて、時間や場所を決め、日本語学習ができるようになればいいなと思っています。来年度すぐできるかどうかはわからないのですが、今そのようなことを考えています。

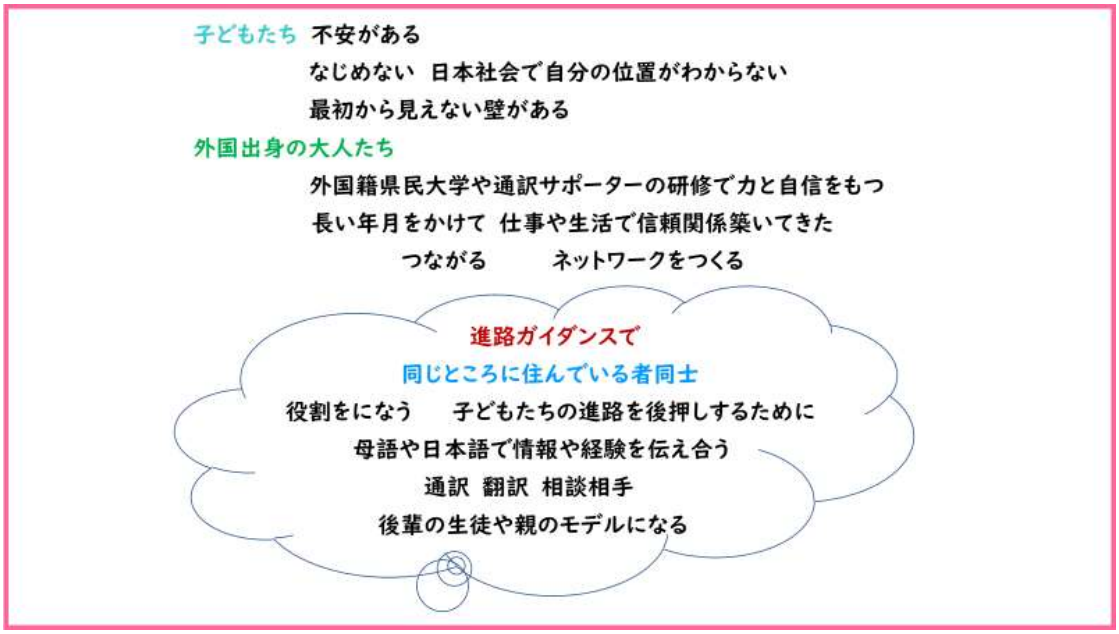
田所: ありがとうございます。菊池さん、どなたかから質問をいただいていますか。

菊池: 今のところご質問はいただいていないのですけれども、どなたかいらっしゃれば、音声のミュートを外していただき、ぜひ質問やコメンをいただければと思います。……今、ご質問を１ついただきました。誠君は、高校では日本語の支援を受けたのですか。高校時代はどうやって勉強しましたか、というご質問です。

陳誠: ご質問をありがとうございます。日本語の支援というと、高校のときも外国人の子ども・サポートの会に所属していまして、そこでボランティアの大学生、社会人のボランティアの皆さんに勉強を教えてもらっていました。高校での特別なことは、そのぐらいでした。

菊池: ご質問くださった方、よろしいでしょうか。

質問者: 大丈夫です。はい、ありがとうございました。



田所: ありがとうございます。それでは菊池さん、最後のページをお願いできますか。これは実行委員会のメンバーの方たちと、進路ガイダンスの振り返りをしながら出てきた言葉なのですけれども、子どもたちについては、大きな不安を持っていて、なかなか馴染むことができない。日本社会での自分の位置がわからない。最初から見えない壁があるなどの言葉が出てきました。また、外国出身の大人たちについては、今まで活動の中で見えてきた宮城外国籍県民大学や通訳サポーター、いろいろな方たちが力と自信をつけていっています。そして長い年月をかけて、それぞれの方たちが地元で仕事や生活の中で、周りの

方たちと信頼関係を築いてきました。そのことが震災を通じて本当によくわかりました。震災の後、みんながバラバラにならなかったのは、そういう方が核になって、つなげてくれたことがとても大きかったと思います。そして、その方たちが築いてきたつながり・ネットワークを、私たちは使わせていただいたわけです。ただ、そのときに感じたのが、先ほど地図を見ましたけれども、県北の方につながりが多かったですけれども、県南の方はまだガイダンスが開けていないです。それは外国の方が少ないということではないと思います。日本語教室あるいは支援団体があるかということが大きく関係しています。これからは南の方でもぜひ開いていけたらと思うのですけれども、そこはおそらく宮城県国際化協会の事業とも大きく関係するかと思っています。

進路ガイダンスの目的は、子どもたちの進路を後押しすることです。そして、役割としては、母語や日本語で情報や経験を伝え合う。通訳翻訳をする。相談相手になる。先輩たち、生徒も親もモデルになっていく。そのような役割が見えてきました。そして、今回のテーマでは“連帯”という言葉を使ったのですけれども、この活動を進めるにあたり、登米、石巻など、いろいろなところに行きました。そこで、こういう進路ガイダンスを開きたいのですけれどもとお話をしていくときに、困ったことが一度もなかったのですね。それは本当に必要なこととして捉えられていて、ガイダンスをしたいのですけれどもとお話を持っていくと、じゃあいつしましょうか、というように話が進んでいきました。ですから、他の事業と違って、その連携をしていくための目標、目的、その手段を前提として話し合うところを飛ばしていくことができるような何か、関わってくる方たちの思い、同じところに住んでいる者同士で子どもの進路を考えることが必要なのだという、そういう思いがあったことを、すごく感じました。それがあったからこそ、いろいろなところでいろいろな方たちの力を得て、このガイダンスをつなげていくことができたのだなと思っています。ここに今並んでいるこの言葉は、この連帯のかたちであると思っています。12年を経てきましたけれども、次の10年はまた、活動のかたちもいろいろ変わっていくと思います。メンバーも変わっていくと思います。ただ、共通していくのは、子どもたちの進路のことをみんなで考えていこう。未来を切り開いていこう、そういう思いだと思います。今日は私達の進路ガイダンスの振り返り

をみなさんと一緒にすることができました。ありがとうございました。ここで菊池さんにバトンタッチしたいと思います。

菊池: 田所さん、ありがとうございました。今回はオンラインでということで、こうやって皆さんと一緒に振り返りができたのですが、今度は実際にお会いして振り返りができればいいなと思いました。ご発表いただきました田所さん、大泉さん、須藤さん、陳誠さん、森野さん、王寧さん、ありがとうございました。そして、お集まりいただきました皆さん、年末が近い週末にも関わらず、ありがとうございました。進路ガイダンスの活動はこれからも続きますので、皆さんにもご協力をいただければと思います。

最後に質問を１ついただきました。活動のお手本にしたり、情報共有したりする他地域の自治体などはありますか、というご質問いただいたのですけども、どなたかお答えいただけますか。

田所: そもそもこの活動をすること、また外国人の子ども・サポートの会という活動をしていくためには、全国のいろいろのところで同じ活動をしている方たちとのつながりが必要でした。その方たちのネットワークがあったから、これができています。それぞれの地域でネットワークがあると思います。それを生かして情報交換をすることが、自分たちの活動に生きてくるので、ぜひそのネットワークを生かしていただきたいと思います。ネットワークは必須ですね。

菊池: 田所さん、ありがとうございます。今日も全国からご参加いただいておりまして、これはオンラインの利点かなと思います。また情報交換できればと思います。では、時間になりましたので、パネルディスカッションはこれで終了したいと思います。引き続きこの後に「対話のひろば」が行われますので、ご都合つく方はぜひお残りいただければと思います。では、パネルディスカッションは以上となります。皆さん、ありがとうございました。

日本語教育学会 2020 年度第５回支部集会【東北支部】
パネルディスカッション「日本語を母語としない子どもと親のための進路ガイダンス
宮城１２年のあゆみ― 子どもの可能性を後押しする“連帯”のかたち ―」報告書

発行日：2021 年 1 月 20 日
発　行：公益社団法人日本語教育学会
〒101-0065 東京都千代田区西神田 2-4-1 東方学会 2F
TEL 03-3262-4291 FAX 03-5216-7552 E-mail office@nkg.or.jp
URL http://www.nkg.or.jp